

第3回 箕面市小中一貫教育推進計画検討会議 記録

【日時】

令和5年（2023年）3月10日（金） 15:30～17:00

【会場】

Zoom会議

【出席者】

各構成員等

【議事概要】

●事務局から報告

- ・ 吳市の視察結果について
- ・ 教員アンケートの結果について

●ブレスト（小中一貫教育を進めるに当たっての課題について）

- ・ 乗り入れ授業は良いことだと思うが、学校規模が大きくなると教員の持ち時間が多くなり、乗り入れ授業ができなくなることがある。
- ・ 教員アンケートの結果では、施設一体型は小6のリーダー性の育成がしづらいなどのデメリットが書かれているが、一貫教育においては、一般的に考えられる「小学校の代表6年生」という概念を外さなければ見えないところがある。
- ・ 小学校・中学校の文化はそれぞれあるが、これからは小中一貫校の文化をどう作っていくんだというところが大事になっているのかなと思う。小中一貫教育を振り返る時期に来ているのかもしれない。
- ・ 一番大事な教育課程のところの議論も、もう一度考えていくことが必要かもしれない。1年間の教育計画があり、学期の指導計画がありという中で、教育課程の中にどう交換授業を入れていくか、どういった形で乗り入れ授業を行い専門性を深めるかという話になるので、例えば乗り入れ授業についても、全体の計画なりイメージがないところでは進みにくいのかもしれない。
- ・ 吳市の視察で印象的だったのが、小学校の先生に対して、高校入試に関する研修を受けてもらう機会を持っているという話を伺ったこと。小学校でどこまで指導していく必要があるのか、小学校を卒業した子たちが3年後にどんな力をつけていく必要があるのか、指導要領とかそういうものも含めて小学校・中学校の教員が一緒に勉強する時間を持つという話を聞き、箕面の学校でもそういうことができるのかもしれないと思った。
- ・ 意識で言えば学年の呼び名も大切。彩都の丘学園については7年8年9年っていう呼び方を学校外のイベントでも使ってもらう。細かいことだが、そういうことでも児童生徒や、周りの人たちの意識が少し変わる。
- ・ できることからやっていくべきだと思う。指導案一つとっても、「一貫教育の視点」というのを一行入れるだけで、単元のつながりを意識することができ、研究授業で見学されている先生にもそこの部分が伝わる。ちょっとした工夫で一貫教育の意識を高めていくことは可能。

- ・ 学校現場の小中一貫教育担当者だけではなかなか進まない。ほとんどの担当者は授業を持っているので小中一貫教育が大事だとはわかっていても、なかなか時間を見つけられないし、連携相手に気を遣う場面もあり、進んでない現状もある。何から始めたらいいのかというところも難しい。
- ・ 学校の小中一貫教育担当者だけではなかなか進まないというご意見尽きると思う。箕面市で小中一貫教育をするというのはこういうことなんだと、それが施設一体型であれ校区連携型であれこうだと、必要最低限のものとして教育委員会が示せば、形は変わってくると思う。それにあたって、やったほうがいいと思うことは中学校区の学校運営協議会を発足させ運用させること。何をすればいいか、今パートナーが何をやってるかということをリーダーがわかっているかどうかで、担当者の背を押してあげられるかどうかが変わってくると思う。全学校長がそういうことをできる・やれる・しなければいけないという体制を教育委員会が創出できるかが、ある意味では課題かなと思う。
- ・ やらなければならないことがたくさんあり過ぎると、やる状況が生まれにくい。やるべきことをはっきりとリーダーがつかめる流れを生み出すことが重要。
- ・ 呉市への視察で、中学校区の小中の校長先生の仲が良いことが連携に大きく影響すると聞いた。小中一貫教育の担当者同士では校区で集まって話したいという意見は出るが、他校の校長・教頭を集めてまで話をする機会となると、担当者発信では難しい。
- ・ 小中一貫と言うと、何かいろんなことやらないといけないのかなと思っていたが、2月の木原教授の研修に行かせていただいて明日からできることは何なのかという話を中学校区の教員で話をすることができ、まずは教員同士が交流しないと校区で何かを統一することもできないから、もっと話す機会を作ろうという話になった。明日からすぐできることとして、例えば中学校区内の学校同士で研究授業の案内を送り合うところから始められるんじゃないかと思っている。
- ・ 箕面市において、英語で9年間を通したカリキュラムを作ることができたのは、英語が当時の小学校の教科ではなかったからということが大きいと思う。一貫したカリキュラムを作る必要性や可能性があったからだと思う。教科書があるものについては、小中一貫の教育課程を組み直すことは結構大変なので、教育課程の特例として、例えば筑波で作ってるような小学校1年生から中学校3年生までの9年間を貫くような目標・内容・活動の並びを考えざるを得ないような教科を作る。そういう教科を作ることで、9年間を見通すという再経験が箕面の先生方もできるんじゃないかと思う。9年間見通した教育課程を組み直すという経験をするということが一つのショック療法であり、ある意味本質なんじゃないかと思った。

以上